

第 12 章

ラオス内戦史資料 (1954 年 ~ 1975 年)

山田 紀彦

はじめに

ラオスは中国、ヴィエトナム、タイ、ミャンマー、カンボジアと国境を接しているという地理的特徴から、ヴィエトナム戦争ではアメリカと北ヴィエトナムの双方にとって戦略的に重要な場所となった。そのため、ラオスは東西冷戦の渦に巻き込まれた。しかしながら、ラオスの内戦は常にヴィエトナム戦争の陰に隠れ、ヴィエトナム戦争の付随として語られてきたのである。内戦が終結してから 26 年が経過した今でも、ラオス人や国家にとって内戦はどのような意味を持ったのか、といった根本的な問題は答えられていない。ラオス内戦を、ラオス人を主体に問い直すことは、現在のラオスを理解する上でも意義があると思われる。

ラオス内戦に関する主な研究は、そのほとんどがアメリカの研究者によって 1960 年代、70 年代に内戦と同時並行的に行われてきた。ヴィエトナム戦争の影響によりアメリカで地域研究が発展し、多くの財政支援がヴィエトナム、インドシナ研究に行われたことが背景にある。内戦の背景や実態を把握することを目的とした研究が多かったが、その中でも、国内問題や内戦の原因だけでなく国際関係の影響も広範囲に分析している Dommen[1972]や Toye[1968]の研究、また、Zasloff[1973]が行ったパテート・ラーオの研究、ラオス内戦での北ヴィエトナムの役割を分析した Langer and Zasloff[1970]による研究は、ラオス内戦を理解する鍵を与えてくれる。

日本では、ラオス史に関する単行書は上東[1990]しかなく、それも全史を非常に概略的に扱っているため、内戦の詳細を知ることが出来ない。桜井・石澤[1977]によるインドシナ現代史研究以外、ラオス内戦を詳細に扱ったものはほとんど見られない。日本におけるラオス研究自体が非常に乏しく、本格的な研究はこれからといえる。

本章は、残された問題に答える出発点として、ラオス内戦史を資料形式で整理

したものである。ラオス内戦を理解するためにも基礎資料の整理は重要であり、今後のラオス研究に資すると考えたからである。

第1節は「ラオス内戦史年表」である。植民地前史にも若干触れているが、フランス植民地時代から内戦終結までを主な対象としている。年表作成に当たっては主に Dommen[1973] を参考にしたが、1971 年は Thee[1971]、1972 年～73 年は桜井・石澤[1977]、1974 年～75 年は Brown and Zasloff[1986]を参考にしている。それ以外は適宜、記載事項の最後に略記号を記した。例えば、(C)は Castle[1993]、(L/Z)は Langer and Zasloff[1970]、(Ste)は Stevenson[1972]、(Stu)は Stuart-Fox[2001]、(Th)は Thee「1973」、(桜井・石澤)は桜井・石澤[1977]、(古)は古田[1991]を示している。ラオスの歴史はその地理的特徴から、常に隣国や大国の影響を大きく受けてきた。ラオスの内戦を分析する上でも、北ヴェトナム、アメリカ、ソ連、中国といった関係諸国の影響を排除することはもちろん不可能である。そのため、ラオスに関連すると思われる関係諸国の動向についても言及した。事件によっては月日が確定できないもの、また、文献によっては月日が異なるものがあるが、原則的に上記に掲げた資料に基づいて作成されている。また、本年表は完成品ではなく、筆者としてはラオス内戦の流れを理解する出発点として位置づけている。

第2節では王国政府と愛国戦線の行政区、両者の支配地域を示す「地図」を掲載し、第3節では「関連資料」として、地名、歴代首相名簿、連合政府閣僚名簿、ラオス愛国戦線中央委員会名簿、愛国戦線政治綱領等をまとめた。第4節では、主に Stuart-Fox[2001]に依拠し、主要な人名、組織名、地名等の用語を解説した。

人名や組織名など固有名詞のアルファベット化は、Dommen[1973]、Stuart-Fox[2001]に依拠しており、それを元に筆者がカナ表記に置き換えた。